

待遇意識を反映する言語形式

—デス・マスは丁寧ですか—

堀 素 子

1. はじめに

本稿は日本語を分析の対象とするが、その方法は伝統的国文法的手段によるのではなく、社会言語学の方法による。歴史的変遷から語を眺めるのではなく、現代の使用状況からその用法・意味解釈を行なうこととする。しかもその背景にある人間の心理をも引き出すことを目的とする。これは社会言語学と心理言語学を合体した視点であって、社会心理言語学とでも名づけたと思う。

この観点の根本にある考え方は、「人はなぜその状況でそのことばを使うか」という疑問に対する手がかりを発見したいという一事につきる、といってもよい。当然と思われている言語事象を洗い直してみると、思いもかけない人間の本質が現われてくることがあり、そこに全く新しい人間の観方、言語の持つ意味を発見することがある。ちょうど生理学者が人体を細かに観察して、我々の自覚の外にありながら自律的に活動している各部分の組織やその関連を発見するのと同じである。

この意味では社会心理言語学は自然科学に近く、一方生きている人間の行動や意識を扱うという点では人文科学に近い。科学的精密さが要求されながら、「人間」という謎に満ちたものを扱うが故に自然科学と同等の精度は期待できない。むしろ究極のところでは、人間をどう捉えるかという哲学的視点、及び、人間の心情とその発露をどう捉えるかという文学的視点が必要となる。その視点の捉え方によって、同じデータでも異なった解釈が可能であり、そこに調査者、分析者の独自性が現われる。以下に述べる小論は、このような観点からの分析であり、社会心理言語学的試みの一つである。

2. 研究の目的

日本語の敬語をどのように分類するか、どの部分がどのような敬意を表わしているか、については各論があって、国語学の外にいる筆者のくわしく知るところではないが、ざっと概観する

と、時枝文法でいう「詞」と「辞」の問題に集約されるのではないかと思われる³⁹。本稿でも基本的にはこの「詞」と「辞」に分ける方法に従い、その組み合わせが現代の日本語の、あるいはそれを使う日本人の、どのような側面を表わしているかを探ってみることとする。

敬語の分類及びその命名には各学者が苦勞しているところであるが、次の分類などは用語も一般的であり、受け入れやすいと思われる⁴⁰。

尊敬語＝話題のひとやその行為・所有の表現をとおして、話し手がそのひとへの敬意的配慮

をあらわす敬語

例－イラッシャル、オ～ニナル

謙讓語＝話題の二人のあいだの行為の表現をとおして、話し手がその上位者への敬意的配慮

をあらわす敬語

例－サシアゲル、オ～イタダク、オ～スル

美化語＝話題のものごとの表現をとおして、話し手が自分の言葉づかひの品位への配慮をあらわす敬語

らわす敬語

例－オシボリ、オヤツ、ゴハン

丁寧語＝話題のものごとの表現をとおして、話し手が聞き手への敬意的配慮をあらわす敬語

例－小生、イタシ、ゴザイ、マイリ

丁寧語＝話し手がもっぱら聞き手への敬意的配慮をあらわす敬語

例－デス、マス、デゴザイマス

このうち、上記の「詞」に相当する部分は尊敬語、謙讓語であり、「辞」に相当する部分は丁寧語、丁寧語であるが、本稿では尊敬語と丁寧語の組み合わせについて、しかも丁寧語の丁寧の度合いについてのみ言及する。

宮地氏その他大多数の国語学者によって丁寧語あるいは敬語と呼ばれているデス・マス形を、柴田氏は普通待遇語と呼び、0の位置に置くことを提案している⁴¹。すなわち、待遇語としては基本形をデス・マスとし、それより丁寧なデアリマス、デゴザイマスをプラスの特別体、それより粗野なダをマイナスの特別体とするのがよい、という⁴²。

筆者の考えも全く柴田氏と同じであって、本稿ではこのデス・マスは待遇語の基本形である、という点を、筆者らが行なった言語調査のデータから証明しようと思う。

3. 敬意と言語形式の関係

具体的なデータに入る前に、いったい敬意はどのような言語形式で表現されるのかを調べてみ

よう。筆者らの調査で使った表現が、イツイクカをたずねる時の各種言語形式であったので、次の生得話者としての筆者の内省による分析にも、イツイクカの形式を使うことにする。

まず「〇〇ハ、イツイクカ」という各表現を、詞に敬意表現を持つもの〈+H〉と持たないもの〈-H〉、辞に敬意表現を持つもの〈+h〉と持たないもの〈-h〉に分け、それらの組み合わせと、話し手、聞き手、動作主との関係を見る。話し手は常に父親とし、聞き手と動作主を息子とその先生として、計4つの場面を想定してみた。それらと〈±H〉〈±h〉の各種の組み合わせを表にして、内省による適否を記入したのが表1である。

表1 話し手、聞き手、動作主の関係と、言語形式の適・不適

敬意表現の有無 〈±H, ±h〉	言語形式	先生 (A)		息子 (A)	
		先生 (H)	息子 (H)	先生 (H)	息子 (H)
〈-H, -h〉	イク ノカ	#	?	#	○
〈-H, +h〉	イク ンデスカ	#	#	○	#
〈-H, +h〉	イキ マスカ	#	#	○	#
〈+H, -h〉	イカレル ノカ	#	○	#	#
〈+H, +h〉	イカレル ンデスカ	○	#	#	#
〈+H, +h〉	イカレ マスカ	○	#	#	#
〈+H, -h〉	イラッシュアル ノカ	#	○	#	#
〈+H, +h〉	イラッシュアル ンデスカ	○	#	#	#
〈+H, +h〉	イラッシュアイ マスカ	○	#	#	#
〈+H, -h〉	オイデニナル ノカ	#	○	#	#
〈+H, +h〉	オイデニナル ンデスカ	○	#	#	#
〈+H, +h〉	オイデニナリ マスカ	○	#	#	#
話し手(S), 聞き手(H), 動作主(A)の関係		S < H = A	H < S < A	H > S > A	S > H = A

言語形式としては〈±H, ±h〉のすべての組み合わせの他に、調査でも高い出現率を示し、また日常よく使われる表現もいくつか重複して出している。話し手、聞き手、動作主の関係は表の一番下にある4つである。

S < H = A 父親が先生に向って、先生の行動をたずねる場合

H < S < A 父親が息子に向って、先生の行動をたずねる場合

H > S > A 父親が先生に向って、息子の行動をたずねる場合

S > H = A 父親が息子に向って、息子の行動をたずねる場合

判定の○は、その状況で左の言語形式を使うことはまず問題がないこと、#は文法的には正しいがその状況にはふさわしくないこと、すなわち、言語形式としてではなく、待遇表現として問題があることを示す。表記法は柴谷 (1978: 58) によった。

表1から、次のことが明らかとなる。

1. 聞き手が動作主である場合(H=A)、話し手からみて聞き手(すなわち動作主)が目上、あるいは尊敬に価する人物である場合(S < H)にのみ、〈+H, +h〉が許され、そう

でない場合 ($S > H$) は $\langle -H, -h \rangle$ のみ許される。

2. 聞き手と動作主が別の場合 ($H \neq A$)、聞き手が話し手よりも下位で、話し手自身も動作主より下位ならば ($H < S < A$)、 $\langle +H, -h \rangle$ のみ許される。ただし、話し手が動作主に敬意を持たない場合は $\langle -H, -h \rangle$ も可能である。逆に、聞き手が話し手より上位で、話し手自身も動作主より上位ならば ($H > S > A$)、 $\langle -H, +h \rangle$ のみ許される。

上の結果でみる限り、 $\langle +H \rangle$ は動作主Aへの敬意を表わし、 $\langle +h \rangle$ は聞き手Hへの敬意を表わしているといえる。しかしながらここでいう「許される、許されない」(○か#か)は、あくまでも待遇表現としての適否であって、言語形式のそれではない。従って場面や相手の受けとり方によってはその適否もまた変化する可能性があるということでもある。しかも現実の言語使用の状況では必ずこれらの要素を考慮に入れなければならない。不特定多数を相手とする新聞・テレビ等でも、ある行動の動作主にどのような表現を用いるかには大変苦慮している。渡辺氏によると、新聞の皇室用語は戦前と戦後で大きく変わり、現在もなお流動的であるそうだが⁹⁾、これは社会状況の変化によって動作主に対する認識の仕方が変化したことの結果である。

まして種々さまざまな相手と、さまざまな人物・事柄について話さなければならない日常の言語使用場面では、話し手は、刻々と変化する状況の中で人間関係を判断し、もっとも適切と思われる言語形式を選んで使っているわけで、それは到底、上のような単純な表にまとめられるものではない。しかも現在の都会におけるように人間関係が複雑に入りこんでいる場合には、上下・尊卑の概念以外の、何か別の判定規準、判断のよりどころが生まれている可能性がある。社会言語学において実態調査を重視するのは、このように揺れ動く言語を適確に捉え分析するには、生得話者の内省にのみ頼った判断では、現実からかけ離れたことばを扱っている危険性があるからである。以下に述べる調査も、本稿の分析も、このような考えに立ってなされたものである。

4. 言語使用の意識調査—概要と結果

4.1 調査の目的と方法

この調査の当初の目的は敬語使用の男女差を調べることにあったが、後述するように、結果的には性差よりも役割差の方が浮び上がって来た⁶⁾。しかしながら方法としては常に男女を比較しながら行なって来たので、以下の項目もすべて男女に分けて調査・分析し、比較した⁷⁾。

インフォーマントには、現代日本語の敬語を大体においてかなりの程度まで細かく使いわけできる層として、女子大学生の両親で、現在東京周辺に在住する者を選んだ。回答者の属性は表2に示す。以下に記す質問を印刷したアンケート用紙を各学生が家庭に持ち帰り、両親に答えをきいて記入した。有効回答数は、男性256、女性271であった。結果はすべてコンピューターに入力し、GLAPS⁸⁾により分析した。

表2 回答者の属性

		男 性	女 性
年 令	49 ~ 49才	30.2%	74.1%
	50 ~ 59	65.9	25.2
	60 ~ 69	3.5	0.7
	70 ~	0.4	0
職 業	自 営 業	8.2	1.5
	会社・法人等勤務	71.1	5.5
	公 務 員	9.0	1.5
	専 門 職	10.9	4.4
	主 婦	—	86.0
	そ の 他	0.8	1.1
学 歴	旧制高校, 大学, 大学院卒	73.2	18.2
	短大, 高専, 旧専門, 旧師範卒	7.5	22.7
	高校, 旧中学, 旧女学校卒	14.2	55.4
	中学, 旧高小, 旧小学校卒	5.1	3.7
東京在住年間	2 ~ 9年	5.5	5.6
	10 ~ 19	9.8	9.7
	20 ~ 29	18.0	37.3
	30 ~ 39	26.3	15.3
	40 ~ 49	19.6	21.3
	50 ~ 59	19.6	10.4
	60 ~	1.2	0.4

4.2 調査の内容

アンケートは4項目にわたり、かなり長いので要点のみ述べる。くわしくは1985年発行予定の研究報告書を参照していただきたい。

まず丁寧度を測るめやすとして、5つの段階を設定した。5を最もあらたまった態度やことば遣いのレベル、1を最も気楽な態度やことば遣いのレベルとして、中間を3とした。5と3の中間を4、3と1の中間を2とし、ややあらたまった、やや気楽のレベルとした。この5段階の尺度の上に、次の3つの質問の回答をのせてもらった。

質問1 「いつ行くか」とたずねるいい方にはどのようなものがあるか。5段階に分けて各レベル最大3表現まで答えてもよい。

質問2 日常どんな人と接するか。名前でなく回答者の何に当るかというカテゴリー名で答える。5段階に分けて各レベル最大3人まで答えてもよい。

質問3 質問2で挙げたそれぞれの人(最大15人)に、「いつ行くか」とたずねる時、何というか。

質問4 質問2で挙げたそれぞれの人に、どんな気持を持っているか。次の問いに、「はい」「いいえ」「どちらでもない」のいずれかで答える。

- (1) その人は目上だと思ふか。
- (2) その人と親しい間柄にあるか。
- (3) その人から頼りがいがあると思われたいか。
- (4) その人に対して上品でありたいか。

調査時間の短縮と、回答を容易にするために、質問に対してイツイクカの変種⁹⁾を50、質問2の日常接する人物カテゴリーを11、参考資料としてアンケート用紙に印刷しておいた。結果的にはこれらの資料が回答者の選択範囲を規制したことになり、もっと慎重に参考資料を選ぶべきであったと反省している。

4.3 調査の結果

質問1で得られたイツイクカの変種は84にのぼり、出現率1%以下のものを省いて図示すると

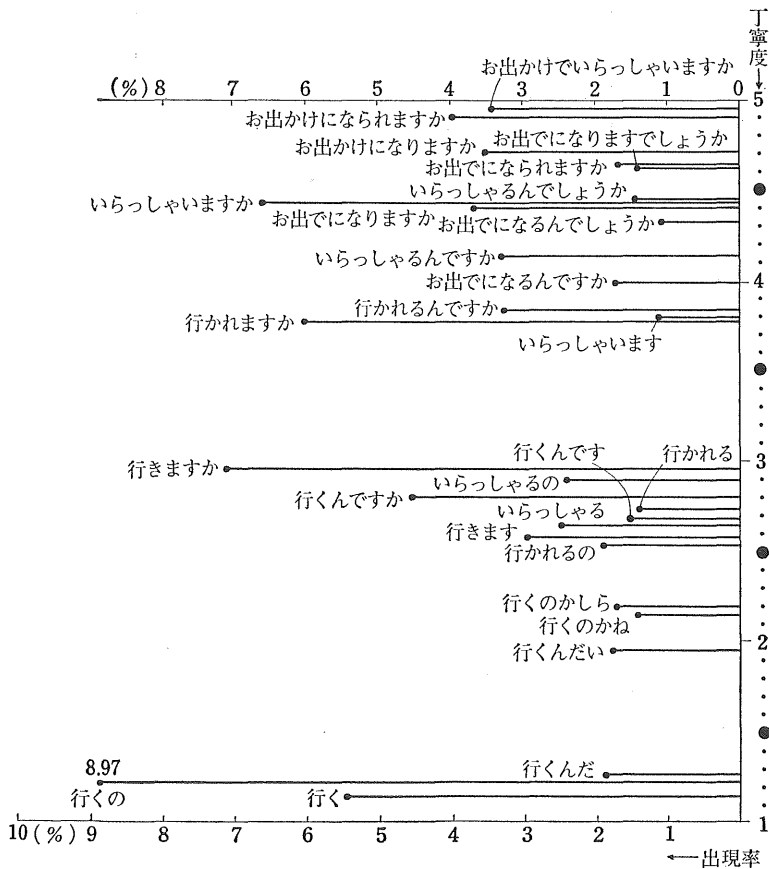


図1 (イツ)イクカの変種——平均丁寧度と出現率(全体)

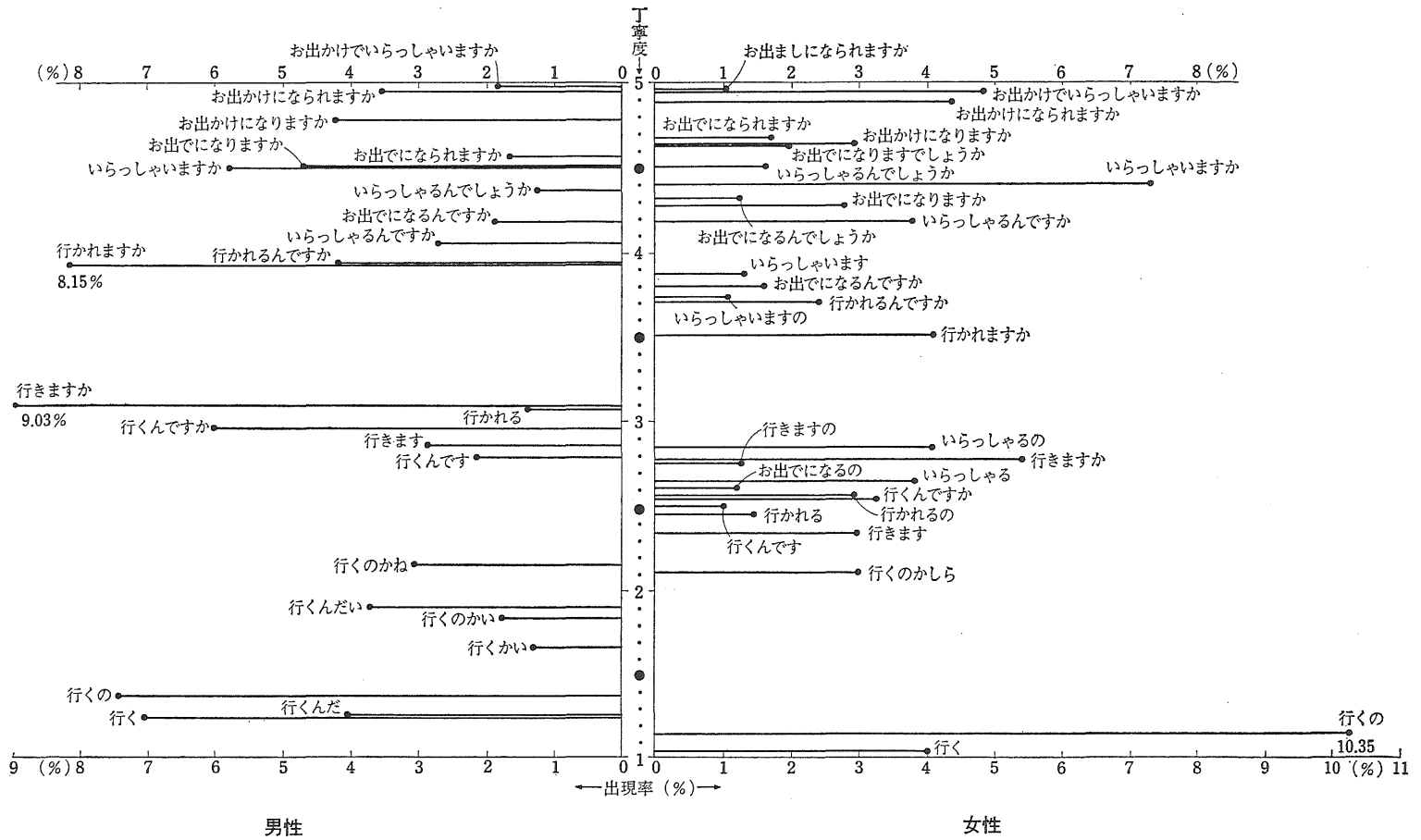


図2 (イツ) イクカの変種——平均丁寧度と出現率(男女別)

図1のようになる。これを男女別にそれぞれ1%以下を省いて図示したのが図2である。これら全体の言語形式についても書くべきことはたくさんあるが、本稿とは直接関連がないのでここでは全体の傾向を図示するにとどめる。

質問2では180にのぼるいろいろな人物が挙げられたが、このうちから出現数が全体で50以上のものを抽出し、表3に示した。また質問4で得られた各人物カテゴリーに対する心理ファクターの平均値をも、表3に記した¹⁰⁾。この数値が1に近いほどその問いに対して「はい」の答えが多く、3に近いほど「いいえ」の答えが多かったことを示す。すなわち、1点代はどちらかといえば肯定的、2点代はどちらかといえば否定的と考えてよい。

表3 人物カテゴリーの出現数と心理ファクターの平均値

人 物	出現数 (全体)	目 上		親 しい		頼 り が い		上 品	
		男	女	男	女	男	女	男	女
子 供	528	2.98	2.97	1.04	1.06	1.17	1.33	2.30	2.05
配 偶 者	327	2.91	1.53	1.03	1.06	1.19	1.79	2.29	1.98
兄 弟	129	2.25	2.21	1.18	1.00	1.49	1.72	2.13	2.14
父 母	53	1.21	1.14	1.15	1.09	1.19	1.91	2.23	2.28
義 兄 弟	87	2.24	1.56	1.52	1.72	1.55	2.22	2.16	2.01
義 父 母	56	1.26	1.06	1.79	1.52	1.31	1.71	1.72	1.92
親 戚	55	2.04	2.10	1.69	1.60	1.72	2.12	1.64	1.83
友 人	309	2.73	2.53	1.28	1.24	1.63	1.88	2.35	2.00
配偶者の友人	102	2.72	1.79	2.58	2.36	2.05	2.41	1.82	1.48
趣味の友人	56	2.68	2.29	1.54	1.83	2.04	2.21	2.43	2.12
近 所 の 人	189	2.57	2.15	2.36	2.09	2.20	2.31	2.07	1.96
配 達 人	109	2.86	2.79	2.70	2.75	2.44	2.74	2.35	2.17
趣味の先生	128	1.50	1.30	2.38	2.36	2.34	2.49	2.13	1.63
子供の先生	242	2.08	1.49	2.74	2.81	2.10	2.50	1.62	1.55
父母会の父母	122	2.43	2.60	2.62	2.34	1.65	2.31	2.09	1.75
部 下	216	2.94	3.00	1.80	2.13	1.21	1.45	2.15	1.87
配偶者の部下	66	—	2.71	—	2.66	—	2.05	—	1.65
同 僚	156	2.75	2.62	1.59	1.54	1.71	1.90	2.35	2.15
上 司	273	1.10	1.07	2.18	2.61	1.40	1.75	1.93	1.80
配偶者の上司	164	1.00	1.07	1.73	2.82	1.00	2.36	2.74	1.29
取引先の人	127	2.23	1.84	2.38	2.44	1.37	1.22	1.82	1.51

5. 考 察

5.1 言語形式と使用する相手の人物との関係

特定の相手に使用する言語形式と、その相手に抱いている心理ファクターとの関係を見れば、敬意というものがどのような言語形式に表われているかを知ることができる。3で内省により調べた〈±H, ±h〉の種々の組み合わせを、4の結果の中から抽出して考察しよう。

表4は、〈±H, ±h〉の各組み合わせの中から、出現数が男女とも50以上のものを抽出し、それを使用する相手の人物を出現率の多い順に併記したものである。たとえば男性がイクという言語形式を使う相手は、「子供」が最も多く、イクを使う相手全体の37.78%を占め、次が「妻」で29.44%、次が「友人」、「部下」と続く。出現数が50以上であっても類似した表現が重なる場合は、数の多い方を選んだ¹⁾。

表4 言語形式とそれを使用する相手の人物カテゴリー

〈±H, ±h〉 言語形式	男 性					女 性				
	出現数	使用する相手の人物と出現率 (%)				出現数	使用する相手の人物と出現率 (%)			
〈-H, -h〉 イク	180	子 供 37.78	妻 29.44	友 人 8.89	部 下 8.33	78	子 供 46.15	夫 19.23	友 人 12.82	兄 弟 6.41
〈-H, -h〉 イクノ	251	子 供 24.70	妻 21.51	部 下 18.33	同 僚 11.55	468	子 供 51.92	夫 15.38	兄 弟 11.11	友 人 6.41
〈-H, -h〉 イクンダ	134	子 供 44.03	妻 20.90	部 下 17.16	友 人 5.97	0				
〈-H, -h〉 イクンダイ	102	部 下 30.39	友 人 24.51	子 供 13.73	同 僚 10.78	0				
〈-H, +h〉 イキマスカ	141	同 僚 20.57	部 下 10.64	友 人 10.64	上 司 5.67	82	夫 21.95	近所の人 12.20	友 人 8.54	配達人 8.54
〈-H, +h〉 イクンデスカ	74	部 下 16.22	同 僚 14.86	上 司 10.81	取引先 9.46	56	配達人 21.43	夫 17.86	近所の人 8.93	友 人 5.36
〈+H, +h〉 イカレマスカ	144	上 司 29.86	取引先 12.50	子供の先 9.72	近所の人 8.33	86	近所の人 17.44	父母会の 17.44	子供の先 11.63	夫の部下 8.14
〈+H, +h〉 イラッシュ イマスカ	68	上 司 33.82	取引先 17.65	取引先の 8.82	近所の人 7.35	169	趣味の先 16.57	子供の先 14.79	近所の人 10.06	父母会の 8.88
〈+H, +h〉 オイデニナ リマスカ	59	上 司 35.59	取引先 18.64	取引先の 10.17	子供の先 10.17	53	趣味の先 13.21	子供の先 13.21	夫の上司 13.21	夫の友人 11.32
〈+H, +h〉 オデカケニ ナラマスカ	66	上 司 59.09	取引先 15.15	取引先の 12.12	子供の先 6.06	80	夫の上司 42.50	子供の先 30.00	趣味の先 7.50	上 司 3.75
〈+H, -h〉 イカレルノ	7					51	友 人 33.33	配達人 17.65	近所の人 17.65	父母会の 5.88
〈+H, -h〉 イラッシュ アルノ	2					94	友 人 32.98	父母会の 15.96	近所の人 11.70	夫 6.38

データの中には、デス・マスに各種の終助詞が付いたもの（たとえば、イキマスノ、イラッシュヤルノカシラ等）や、何も付かないもの（たとえば、イカレル？ オイデニナル？ 等）がたくさん現われているが、デス・マスだけについて論じる際に終助詞を含めると、終助詞自体の持つ丁寧度¹²⁾に左右されるので、ここではすべて、デス・マスに疑問の終助詞カが付いたものだけにした。

〈 $-H$, $-h$ 〉については、正確にはイクだけであるが、それでは他との比較がしにくいので終助詞の付いたものも一部含めた。なお、カを付けたイクカという形式は一度も回答に現われなかった。また、〈 $+H$, $-h$ 〉は男性には極めて少なかったので、主として女性のデータとなった。

表4から〈 $\pm H$, $\pm h$ 〉の各組合せと、相手の人物を並べてみると次のようになる。

男性が使う言語形式と相手の人物

〈 $+H$, $+h$ 〉 上司, 取引先, 取引先の上司, 子供の先生, 近所の人

〈 $-H$, $+h$ 〉 同僚, 部下, 上司, 友人, 取引先

〈 $-H$, $-h$ 〉 子供, 妻, 部下, 同僚, 友人

女性が使う言語形式と相手の人物

〈 $+H$, $+h$ 〉 夫の上司, 子供の先生, 趣味の先生, 自分の上司, 近所の人, 夫の友人, 父母会の父母, 夫の部下

〈 $-H$, $+h$ 〉 夫, 配達人, 近所の人, 友人

〈 $+H$, $-h$ 〉 友人, 父母会の父母, 配達人, 近所の人, 夫

〈 $-H$, $-h$ 〉 子供, 夫, 友人, 兄弟

5.2 言語形式と使用する相手の人物に対する気持との関係

前項のリストと表3の各人物に対する心理ファクターの値を比べてみると、男女各々が〈 $\pm H$, $\pm h$ 〉の各組合せをどのように意識しているかが浮び上がってくる。

まず男性の〈 $+H$, $+h$ 〉を使う相手に対する心理ファクターの値を見ると、完全に目上だと思っているのは「上司」だけで、その他の「取引先の人」とか「子供の先生」とかからは、上品と思われたい気持の方が強いことがわかる。従って男性は〈 $+H$, $+h$ 〉は尊敬語としてだけでなく、上品さを示す語としても捉えているらしい。〈 $-H$, $+h$ 〉を使うのは、「上司」を除いては「同僚」「部下」「友人」など、どちらかといえば目下と思う相手であり、上品さよりも頼りがいがあると思われたい相手であり、同時に親しい間柄の相手であるといえる。

ところがここに現われた「同僚」「部下」「友人」は、〈 $-H$, $-h$ 〉を使う相手としても挙げ

られており、 $\langle -H, +h \rangle$ と $\langle -H, -h \rangle$ との境界はあまりはっきりしない。同じことは $\langle -H, +h \rangle$ と $\langle +H, +h \rangle$ との間でもいえることであって、「上司」「取引先」が両方に現われている¹³⁾。

以上を眺めると、男性は $\langle -H, -h \rangle$ は完全に目下で、非常に親しい相手に限って使い、 $\langle +H, +h \rangle$ は完全に目上か、あるいは自分を上品に装おって見せたい相手にのみ使い、 $\langle -H, +h \rangle$ はどちらかといえば目下で親しく、あまり気取らなくてよい相手に使う、ど見てよからう。ただしその境界は互いに侵入しあっていて、絶対的なものではない¹⁴⁾。

つぎに女性を見てみよう。 $\langle +H, +h \rangle$ を使う相手は必ずしも目上とは限らず、「近所の人」「父母会の父母」「夫の部下」のような、目下と見なしている相手も入っている。これらの相手からは、上品だと思われたい気持が相当強いので、これが $\langle +H, +h \rangle$ を使わせる大きな理由と思われる。しかし表4を詳細に見ると、男性とはちがって、各言語形式を細かく使いわけているらしいことが推察される。すなわち、オ～ニナリ／ナラレ マスカは完全に目上と思っている「夫の上司」「自分の上司」「子供の先生」「趣味の先生」にのみ使い、イラッシャイマスカは目上目下のどちらにも使い、イカレマスカは目上にはほとんど使わない、という区別をしている。

男性が $\langle -H, -h \rangle$ に比較的多くの変種を持ち、微妙に使いわけているらしいのに反して、女性は $\langle -H, -h \rangle$ は種類も少なく、使う相手も限定しているようすがうかがえる。すなわち、男性の $\langle -H, -h \rangle$ を使う相手に対する「目上・目下」の心理ファクターは2.75～2.98の間に集中しており、相手を目下と見なしていることが明らかであるが、女性の場合は $\langle -H, -h \rangle$ を使う「子供」「夫」「友人」「兄弟」に対する「目上・目下」の心理ファクターは1.53～2.97の開きがあって、これが決定権を握っているとはいい難い。ところが「親しさ」のファクターをみると1.06～1.28の間に集中しており、これが女性に $\langle -H, -h \rangle$ を選ばせる主たる要因であることがわかる。(ちなみに男性の $\langle -H, -h \rangle$ を使う相手に対する「親しさ」のファクターは1.03～1.80で、女性ほど集中していない。)

次に、女性が $\langle +H, -h \rangle$ 及び $\langle -H, +h \rangle$ を使う相手を比較してみると、「友人」「近所の人」「父母の会の父母」「配達人」「夫」等、重複しているものが多い。しかしこれも詳しく見ると出現率に微妙な差があるのに気づく。すなわち、イラッシャルノは「配達人」に対しては全然使わないが、「友人」に対しては一番多く使う¹⁵⁾。逆に、イクンデスカは「配達人」に一番多く使われ¹⁶⁾「友人」には少ししか使われない。イキマスカは「夫」に対して一番多く使われ¹⁷⁾「配達人」に対してはそれほど多くはない。この、イキマスカとイクンデスカは、本稿では共に $\langle -H, +h \rangle$ として同じ項にまとめているが、実は同じと断言できない点もある。その一端がこの「夫」と「配達人」への出現率の差となって現われているのかもしれない。この二つの人物カテゴリーに対する女性の平均的心理ファクターは、4つのすべてについて大きく離れている。つま

り「夫」に対してはすべての値が1に近く（肯定的であり）「配達人」に対してはすべて3に近い（否定的である）。この心的距離の差がイキマスカとイクンデスカの使いわけをさせているのかもしれない。

いずれにしても、今述べた人物は「夫」を除いては多少の差はあれ、いずれも心理ファクターが「目下」の方に近い相手である¹⁸⁾。従って $\langle +H, -h \rangle$ も $\langle -H, +h \rangle$ も共に、明確に「目上」と断言できる相手には使うことはなく、むしろ「目下」と見なしている相手に使う言語形式であるといえよう。

5.3 相手の人物と、心理と、言語形式

前項で述べたことを簡潔に箇条書にすれば次のようになる。

男性の場合

- (1) 完全に目上である相手、尊敬に値する相手、自分を上品に見せたい相手には $\langle +H, +h \rangle$ を使う。
- (2) 完全に自分より目下であり、同時にかなり親しい間柄である相手には $\langle -H, -h \rangle$ を使う。
- (3) (1)と(2)の中間として $\langle -H, +h \rangle$ がある。($\langle +H, -h \rangle$ は男性のデータには極めて少ない。) これを使う相手は $\langle -H, -h \rangle$ を使う相手と重複しているが、決定的なちがいは $\langle -H, +h \rangle$ は家族には絶対に使わないということである。従ってこの形式は、目下でありあまり親しくない相手に使う、といってよかろう。

女性の場合

- (1) $\langle +H, +h \rangle$ を使う最も強い要因は、相手が目上であることよりも、相手から上品と思われたい気持であり、本当に尊敬に値する目上に対しては $\langle +H, +h \rangle$ の中でも更に丁寧度の高いオ～ニナリ／ナラレ マスカを使う。従って女性の $\langle +H, +h \rangle$ は一括して述べることは不可能で、相手との関係により各言語形式を使いわけているとしかいいようがない。
- (2) $\langle -H, -h \rangle$ は、相手が目下であるということよりも、親しさの気持の強い相手に専ら使う。
- (3) 中間の形式である $\langle +H, -h \rangle$ 及び $\langle -H, +h \rangle$ は、目上でない相手に使う。ただしこの二つの使いわけ、及び $\langle -H, +h \rangle$ の中のイキマスカ、イクンデスカの使いわけは大変複雑であって、一括して述べることはできない。しかも同じ人物が複数の言語形式を使う相手として何回も挙がって来るのをみると、女性回答者個々の間の idelect によるのかもしれないという見方もできる¹⁹⁾。

6. ま と め

以上をまとめると、デス・マスという〈+h〉の標識はそれだけでは目上に対する尊敬や丁寧の気持を表わすことはできず、〈+H〉と組み合わせられてはじめて敬意を表明することができる。すなわち〈-H, +h〉形のイキマスカ、イクンデスカは、男性の場合は目下でありあまり親しくない相手、目上でもそれほど目上でない相手に使い、女性の場合は、目下で親しくない相手に使い、目上には夫以外はずまず使わない。ということは、〈-H, +h〉は親しくない相手との距離を保つ役目をしているといつてよい。

従って、デス・マスは丁寧形としてよりはむしろ、人と人との距離を保つことばの bubble²⁰⁾の機能を持ち、特別に親しいとか、上下関係がはっきりしているとかということのない、ふつうの間柄の相手に使うのに最もふさわしい最もふつうの言語形式といつてよい。すなわち、デス・マスは無標であり、その上下を特別の意味を持つ有標の言語形式と考えるのが、現在の標準的日本語話者の意識であるといえよう。

このように見てくると、かつて敬語は上下関係を表わす明確な手段であり、その規則を破ることは敬意を欠くものとして、場合によっては具体的な制裁が加えられることもあったが、現在では上下意識ももちろん残しながら、それ以上に相互の人間関係を調節するものとしての機能の方が強いのではないかと思われる。すなわち、デス・マス程度の丁寧語では積極的に敬意を表わすことはもはや不可能で、それよりもむしろそれらを使用しないことによって相手に不快感を与えることを避けねばならぬ、というのが実態ではなからうか。つまり、デス・マスを欠いた言語形式を用いることは proxemics (個体間距離論,あるいは近接学)でいう、相手の個人的空間の中にことわりもなく侵入して行くことになり、相手を脅やかすことになる。これはまさに動物行動学でいう、なわばりを侵す行為であり、相互の間に緊張を生じさせる²¹⁾。従って現代の都会生活のように、接触する相手との直接的関係が非常に稀薄で、相手がどういふ人間かもよくわからない社会では、なるべくそのような摩擦を避けるために、デス・マスという形を使って、対人関係の距離を保っているのであろう。

これまで敬語の研究は文法や言語形式にのみ集中していた感があるが、上述のように人間関係を調節するものとして眺めてみると、これまでとちがった展望が開けるかもしれない。これは今後の筆者の課題でもある。

以上、デス・マスは丁寧語ではなく、常体語であることを、調査結果をもとに述べた。

注

- 1) 「オッシュアル」「申シアゲル」等は「詞」に統する敬語であり、素材の認識の仕方を用いのであって、対象に対する敬意を表わすものではない。一方、「デス」「マス」等は「辞」に属する敬語であり、場

面、すなわち聞き手に対して敬意を表わす。というのが時枝文法でいう「詞」「辞」の意味であると、大石氏は説明している。ただし、「詞」「辞」の表わす内容についてはいくつかの批判があり、特に「詞」には敬意が表われているという見解、「辞」には社交的性格があるという意見もあるという。(大石 1974 : 13-16)

- 2) 宮地 1983 : 5-6. 他に辻村氏の対者敬語 (デス・マス) 素材敬語 (イラッシュアル, 申シアゲル), 三上氏の普通調 (ソウダ) 丁寧調 (ソウデス) 御丁寧調 (サヨウデゴザイマス) 等の分類もある。
- 3) 柴田 1979. 文体を区別するとき、「常体」と「敬体」に分けることがあるが、柴田氏は『「常体」が『普通待遇語』、『敬体』が『特別待遇語』に当たる』(ibid: 4) と述べて、間接的にはあるが、デス・マスが「常体」であることを指摘している。この考え方は現在も変わっていないということを、直接柴田氏から伺った(1984年10月)。なお、「常体」という語は他の学者によっても使われていることを柴田氏に教えて頂き、以下の資料を見ることができた。感謝して記す。すなわち、辻村敏樹、西田直敏の両氏が「国語大辞典」の中で「常体」に言及しているが、その意味は両氏とも、ダ・デアル体を指していて、デス・マスは「敬体」の中に入れていた。ただし辻村氏は「語彙的事実」として捉え、西田氏は「国語文の文体」の枠の中で捉えていて、「待遇語」として見ているわけではない。(『国語学大辞典』1980 : 259, 269, 354)
- 4) ただし言語形式としてはダを基本形とするか、あるいはゼロ形を基本形とするのがよい、と柴田氏は述べている。従ってここではあくまでも待遇語としての視点である。
- 5) 文部省科学研究費による特定研究、研究発表会(59年2月6日)における渡辺友左氏の口答発表「社会変化と敬語行動の標準」による。なお同研究報告書「言語の標準化研究報告4」(pp. 49-50)にも要約が掲載されている。(渡辺 1984)
- 6) 女性回答者の大部分は専業主婦であったが、中に少数ながら仕事を持つ女性が混じっていて、彼女らの職場での言語行動のパターンは男性のそれとよく似ていた。また同時に男性も、仕事をはなれた社交上つきあう相手に対する言語行動のパターンは、主婦のそれとよく似ていることがわかった。なおこれは注5と同じ研究発表会で筆者が口答発表した。(堀 1984)
- 7) 本調査は昭和57年から59年までの3年間、文部省科学研究費による特定研究「情報化社会における言語の標準化」(主査57~58年度柴田武, 59年度木下是雄)の中の一つとして行なわれた。筆者らのグループの課題は「女性の敬語の言語形式と機能」で、研究代表者井出祥子、研究分担者川崎晶子、生田少子、芳賀日登美、及び筆者である。
- 8) 埼玉大学荻野綱男氏作成の言語分析用のパッケージプログラムで数量的処理に適している。
- 9) 同じ内容を伝えるが現われた言語形式は異なるもの。変異形ともいう。Variant の訳語。
- 10) この数値は、「はい」に1、「いいえ」に3、「どちらでもない」に2という数を与えて、間隔尺度で算出したもの。
- 11) イクノカネ(男性のみ76)、イカレルンデスカ(男性68, 女性35)、オデカケニナリマスカ(男性58, 女性51)は省いた。
- 12) 終助詞にも丁寧度があると筆者は考えている。この点については次のテーマとして書きたいと思う。終助詞「カ」が付くと丁寧になるという報告もある。(荻野 1984 : 14)
- 13) しかし「上司」に使う全言語形式の中では $\langle +H, +h \rangle$ が大部分を占め、 $\langle -H, +h \rangle$ は 6.62% にすぎない。
- 14) これは二百数十名という回答者の出した回答を平均したからで、一人一人の回答者としてははっきり区別しているはずである。つまり *idelect* (個人言語) の範囲は個人によって広かったり狭かったりするが、その中での区別はきちんとつけているのではなからうか。この点について荻野氏が数量化Ⅲ類を使って「丁寧なことばづかいをする人」と「ぞんざいなことばづかいをする人」を分離した報告は参考になる。(荻野 1983 : 86-89) 下の注19も参照のこと。

ただし、筆者らが、この意識調査と平行して行なった「主婦の一週間の談話資料」(井出他 1984)を一部分析した結果では、1人の主婦が各変種をいろいろな人に使っているという事実もある。ただ、そ

これらの出現率を比べてみれば、おのずと意識調査に示されたような一定の段階があることは明らかとなる。(59年10月8日の科研費特定研究「言語の標準化」研究発表会における共同研究者生田少子の発表から。生田 1984)

- 15) 女性が「友人」に対して使う全言語形式の中でも、イラッシュアルノは出現率が一番高く、17.03%である。ちなみに -ノの付かないイラッシュアル? は13.74%で、この2形式で30%以上を占める。
- 16) 女性が「配達人」に使う全言語形式の中で、イクンデスカはイクノに次いで出現率15.0%である。
- 17) ただし「夫」に使う全言語形式の中では、イクノが最も多く44.44%を占め、イクマスカは11.11%にすぎない。
- 18) 「夫」を「目上」と答えているのは嘘ではないにしても、その「目上」の内容は、「上司」や「子供の先生」とは相当ちがうのではあるまいか。
- 19) 荻野氏の調査によると、ある人は誰に対してもシッテル/シッテマスを使い、他のある人はほとんど全部の相手にゾンジテイマス/オリマスを使う。また前者はイラシタ、イッテを専ら使うのに比べて、後者はオイデ/オミエ ニナル、ウカガウを専ら使う。(荻野 1983:96)
上の注14 で述べたように、実際の発話では同一話者がさまざまな変種を同じ相手に使っているので、このような調査結果は意外に実態を反映しているのかもしれない。
- 20) 人が自分の周囲に張りめぐらせている目に見えない空気の泡のことで、これによって自分を外界から無意識のうちに守っている。この考えはアメリカの文化人類学者 Edward T. Hall が提唱したもので、次のように定義されている。

We know from research that everyone has around himself an invisible bubble of space that contracts and expands depending on several factors: his emotional state, the activity he's performing at the time and his cultural background. This bubble is a kind of mobile territory that he will defend against intrusion.

(我々は調査の結果、人はみな自分のまわりに目に見えない空間の泡とでもいうべきものを張りめぐらせていて、それは種々の要因によって縮んだり広がったりすることを知った。すなわち、その時の心理状態、行なっていることがら、及び各人の文化的背景によって、その泡は大きくも小さくもなるのである。この泡は、人が侵入者に対して身を守るための移動可能ななわばりといってもよい。)
(Hall and Hall 1971, 訳筆者)

- 21) これはイギリスの動物行動学者 Desmond Morris の主張にそったもので、彼は動物の行動の分析方法でもって人間の行動を分析した。そのうち人間の非言語コミュニケーションについては *Manwatching* (「人間観察」1977) の中に詳細な記述がある。上の注20 で言及した T. Hall と同じ視点をとっているが、Morris の方がより「行動」に主眼をおいているといえよう。同書の中の *Territorial Behaviour* (なわばり行動) の章には、次のような文が散見している。

.....we all carry with us, everywhere we go, a portable territory called a Personal Space. If people move inside this space, we feel threatened. If they keep too far outside it, we feel rejected.

Personal Space — 'elbow room' — is a vital commodity for the human animal, and one that cannot be ignored without risking serious trouble.

.....anyone who invades our Personal Space is, in effect, threatening to extend his behaviour into one of these two highly charged areas [love and hostility] of human interaction (我々はみな、どこへ行く時も「個体空間」とでもいうべき持ち運び可能ななわばりを持って歩いている。もし他人がこの空間の中に入って来たら、我々は脅威を感じる。もし彼らがこの空間の外遠くへ離れていたら、我々は拒否されたと感じる。)

個体空間——「ひじを自由に動かせる空間」——は、人間という動物にとって欠くべからざる必需品であり、それを無視することは重大な争いを起こす危険を冒すことになる。

だれであれ、我々の個体空間に侵入して来る者は、人間関係が高度に緊張する〔愛情と敵意(筆者註)という]二つの領域のいずれかに踏み込もうとしているわけで、事実上我々を脅やかしていることになる。(Morris 1977, 訳筆者)

- 22) 社会学者の鈴木氏は、このような社会を「第三空間」と呼び、「一過性の匿名の他者」から成る「未知型の対人関係が前提としてある空間」と定義している。このような社会では、規範的伝統的な敬語行動とは別の軸をもった、あるいは「新たな視角」から眺めた敬語意識・敬語行動が大きな比重を占めるであろう、と氏は予想している。(鈴木 1984)

参考文献

- Hall, Edward T. and Mildred R. Hall, *The Sounds of Silence. Language: Introductory Readings*, St. Martin's Press, 1971.
- 堀 素子, 敬語の測定に関するある試み——男女差の比較から——. 津田塾大学紀要, No. 15, 1983, pp. 179-204.
- 堀 素子, 言語調査において数に現われないもの. F. C. パン, 秋山高二, 堀 素子編, 機能によることばの分析, 広島:文化評論出版, 1983, pp.97-109.
- 堀 素子, ことばの性差と標準化. 言語の標準化研究報告4 情報化会における言語の標準化総括班研究成果報告書 1983, 研究代表者柴田武, 1984, pp.53-54.
- 生田少子, 女性の敬語の社会言語学的分析——主婦の一週間の言語生活録音記録から——. 「言語の標準化」研究中間報告, 研究代表者木下是雄, 1984, pp.53-54.
- 井出祥子, 生田少子, 川崎晶子, 堀 素子, 芳賀日登美, 主婦の一週間の談話資料: 本文解説編, 索引編. 文部省科学研究費による特定研究研究報告書, 1984.
- 国語学会編, 国語学大辞典, 東京:東京堂, 1980.
- 三上 章, 日本語の構文. 東京:くろしお出版, 1963.
- 宮地 裕, 敬語をどうとらえるか. 日本語学, Vol.2, No.1, 1983, 1月号, pp.4-12.
- Morris, Desmond, *Manwatching*. London: Elsevier Publishing Projects SA, and Jonathan Cape Ltd., 1977. 日本版英文テキスト, *Manwatching: A Study of Human Behaviour*, Annotations by Tadao Kubouchi. Tokyo: Kinseido, 1980.
- 荻野綱男, 敬語調査への数量化理論第3類の適用. 言語学演習, 東京大学文学部言語学研究室, 1983 pp. 78-102.
- 荻野綱男, 敬語の使い分けの自由回答データから表現の丁寧度を求める. 計量国語学会第28回大会ハンドアウト, 1984.
- 大石初太郎, 敬語の本質と現代敬語の展望, 敬語の体系. 敬語講座第I巻, 東京:明治書院, 1974, pp.8-46.
- 柴田 武, 社会言語学の課題. 東京:三省堂, 1978.
- 柴田 武, 敬語と敬語研究. 言語, Vol.8, No.6, 1979, 6月号, pp.2-8.
- 柴谷方良, 日本語の分析——生成文法の方法——. 大修館, 1978.
- 鈴木勁介, 都市青年層の敬語意識と敬語行動の標準, 「言語の標準化」研究中間報告. 研究代表者木下是雄, 1984, pp.51-52.
- 辻村敏樹, 敬語の史的研究. 東京:東京堂出版, 1968.
- 渡辺友左, 社会変化と敬語行動の標準. 言語の標準化研究報告4 情報化社会における言語の標準化総括班研究成果報告書 1983, 研究代表者柴田武, 1984, pp.49-50.